

アムールの風

（正統右翼の論理）

・第13回
田中健之
（黒龍會会長）

第二章 知られざる日本裏面史

（無責任な戦後日本）

——中途半端な日本の戦後処理——

日本が戦争に負けた時、汪兆銘をはじめ日本と関係があった中国人たちはどうなったのでしょうか。皆、中国の裏切り者、つまり漢奸だとされて、死刑になりました。

その漢奸第一号にされたのは、繆斌という人です。

繆斌は、大東亜戦争末期の昭和二十（一九四五）年三月、日本に原爆が落とされるから和平を決意した方が良い」として、

重慶政府（蒋介石）の密命を受けて、和平工作のためにわざ

わざ来日した人物でした。しかし日本政府は、彼を和平ブローカーと決めつけて相手にせず、重光葵をはじめとする外務官僚と軍部の連中が繆斌を追い返してしまいました。しかし、彼が予言した通り、原爆が広島と長崎に投下されました。

繆斌が漢奸として死刑第一号となった理由は、中国の一国和平を禁止していた、米英との密約を蒋介石が破って、日本に繆斌を派遣して、和平を促したことが米英に露見することを恐れて、蒋介石は汪兆銘と関係もあった繆斌を漢奸とし処刑することで、対日和平工作の事実を米英に対して封印したのでした。

ちなみに繆斌の従弟は九〇年代の国家副主席の栄毅仁です。栄毅仁という人は、「赤い資本家」と言われて中国共産

党ではありませんが、国際信託投資公司などの中国を代表する企業の社長を務めた現代中国の実業家です。

彼らは、汪兆銘政権を支持したことによって、蒋介石から裏切り者だとされたために、台湾に行くことはできませんでした。そのために彼らは、中国共産党が支配する大陸に残らざるを得なかったのです。

日本を信じて、日本と常に行動をして、日本と共に戦った、汪兆銘に代表される中国人たちが漢奸という裏切り者のレッテルを貼られて今日に至っているのです。

それに対して、未だに日本は、日本の戦友であった彼ら汪兆銘一派に対する、名誉回復を施すなどの努力をまったくしていません。つまりそれは、日本が戦後処理をきちんとしていないことを物語っています。

台湾出身の元日本兵の問題も同様です。朝鮮半島出身の特攻隊員やBC級戦犯として死刑になった人びとの問題も同じです。それらはすべて、日本の戦後処理がきちんとしていないことが問題なのです。

——戦争責任をとらずにアメリカの手で再び権力の座に就く者たち——

日本の敗戦と共に、戦勝国であるアメリカを中心とした連合国は、戦争犯罪人を裁くとして、東京裁判として知られている極東軍事裁判を開始しました。

戦勝国側である連合国によって、我々日本人が、一方的に戦争犯罪人を裁かれる道理は断じてありません。戦争犯罪を裁くというのであれば、中立国のみが戦勝国、敗戦国の区別なく平等に戦争犯罪を裁く資格があるのだと、私は強く思っています。もちろん戦勝国による戦争犯罪も断じて裁かなくてはなりません。

原爆や日本本土への大空襲は、アメリカによる日本人大虐殺です。そういうものが、「人類に対する罪」として、戦犯として裁かれるべきです。

その一方、日本人自身も、日本を敗戦に導いた政府指導者の責任はきちんと総括しなければいけません。なぜならば敗戦に日本を導いた結果、日本を危機へと追いやった責任が、戦争指導をした政治家と軍人にはあるからです。

敗戦による国家的な危機は、天皇を中心とした日本本来の国體が破壊される危機を招きました。

すなわち戦勝国が、東京裁判において私刑的に戦争犯罪人を裁くのではなく、日本人自身が天皇陛下と日本国民に対して、日本を敗戦に導いた責任としての戦争責任を裁

く必要があるのです。つまり、戦勝国によって裁かれる。戦争犯罪ではなく日本人自身が総括する。戦争責任なのです。日本人みずからの手によって、日本を敗戦に導いた戦争責任を問うことなく、今日まで及んでいます。

その一方で、日本本土空襲を命じて日本人大虐殺の指揮をした戦争犯罪者とも言うべき、米軍のカーチス・ルメイ大將は、その戦争犯罪を問われることがなかったばかりか、その逆に、日本政府から勲二等旭日大綬章を贈られています。この時は、さすがに昭和天皇は親授されることもなく、謁見もされませんでした。

ここで改めて言うと、当時の日本の指導者たちは、戦勝国が言う戦争犯罪人ではなく絶対ではありません。戦犯は戦勝国のアメリカをはじめとする連合国によって、意図的に作られたものです。

日本を敗戦に導いた戦争責任は戦争を指導した政治家と軍人などにあります。その責任は、戦勝国である連合国に対して負うものではなく、天皇陛下と日本国民に対して自主的にその責任を負わなくてはならないものです。それは日本人が追求すべき問題であり、日本を敗戦に導いた指導者の敗戦責任を問うだけの話です。

阿南陸軍大臣をはじめ、特攻の生みの親である大西瀧

大勢の乗員、乗客が死亡した場合には、引き続きその航空会社のトップでいるということはあり得ないことでしよう。普通ならば、責任をとってトップを辞任します。

航空事故を起こしてたくさん死者を出した航空会社の社長は、直接的に事故を起こして、多勢の人々を死なせたわけではありません。しかしその社長が平然として社長の椅子に座り続けていたとしたら、被害者の家族は基より、通常の社会も、その会社や社長に反発するでしょうし、社長の座に座り続ける人物は、頭がおかしいと思われるで当然です。

しかし、日本の国家権力の中枢には、日本を敗戦に導いた責任を問われずに、そういう類の人々がもう一度、政治の中枢に座っているのです。それは決していいはずがありません。そういう類の人々は本来ならば、野に下って隠居すべきです。しかし彼らが再び日本の指導者となって、権力の中枢にいるのです。それもアメリカのCIAから長年にわたって政治資金を受け取っているのです。まさに戦後の保守政治の原点、いや汚点はそこにあるのです。彼らが、政治家として返り咲くのは絶対にダメなことなのです。

何故ならば、日本を敗戦に導いた政治家としての責任を果たしていないからです。

次郎中将などの方々は、日本を敗戦に導いた責任を自ら果たすべく、腹を切って自決しました。その他にも大勢の戦争に責任ある人々が自決をして、天皇と国民に責任をとり、ケジメをつけています。

また民間人でも、主に尊攘義軍の二十二名の男女をはじめ、明朗会の十二名、大東塾の十四名が自決しています。

その一方で、自決しないで戦後の日本に残り、再び権力の座に、それも裏からアメリカによって操られていた政治家がいることが、戦後の日本に問題があると言わざるを得ません。

戦時中に政治的な責任があつた者の中には、戦勝国であるアメリカの思惑によって、戦後の社会に返り咲いて、公職に就いたり政治的指導者になったりしています。このことに対して私は矛盾を感じざるを得ません。

そういう日本を敗戦に導き、亡国の岐路に立たせた権力者に対して、目をつぶって支持してきた日本の国民の側にも、大きな問題があると、私は思っています。

それを会社に例えるならば、はじめに一所懸命に会社のために働きました。しかし事故を起こしました。そうした場合には、その会社のトップの人は責任を問われるわけです。自分が社長を務める会社が運行する航空機が墜落して、

責任感を持った人々は、死んだり自決したりしている。残っていた人も公職追放されました。

しかし戦争に責任があつた者の一部が、戦勝国であるアメリカの利害によって、政治家として返り咲いたり、公職に就いたりし、戦後日本社会を築いて来たという事実に対して、私は矛盾を感じざるを得ないのです。

——グローバル化は新植民地主義——

孫文は、神戸において「大アジア主義」という最後の講演をしています。そこで彼は、「日本が西洋覇道の番犬となるか、それとも東洋王道の牙城となるか、よく考えるべきだ」と強調しました。

日露戦争に勝利した日本は、その後一層欧米に近づいていきます。日英同盟であるとか、アジアの中で唯一、大ロシアに勝ったという意識によって、日本の政治家や官僚が驕って行きました。

こうした雰囲気の中、中国が遅れているとか、近代化していないとか色々と言われていました。それは中国の本質を知らない人々が言っているにしか過ぎません。彼らは、中国はこうなのだ、ステレオタイプ的に決めてかかって

います。要するに日本こそが1+1=2という単純な構造なのです。

民族の発展というのは、それぞれの民族の文化伝統に基づいた発展の仕方であり、やり方があるのであり、民族の文化伝統を無視した形の発展は、良くない結果を招きません。

近代化という言葉は、一般的に欧米化を意味しています。従って私たちは近代化を最も優れている体制だとして、日本の先導によってアジアを欧米化する宣布になつてはいけないことです。今日でいえば、グローバル化がその流れです。これは新植民地主義です。

大東亜戦争の敗戦によって日本は、七年間ほどのアメリカによる占領統治で植民地化されてしまいました。

その間にうやむやにされた問題として、朝鮮の問題と台湾の問題があります。そういう問題を作った原因は、日本の敗戦に伴うアメリカの占領体制にあります。

朝鮮半島は、日韓併合によって、国際法的に日本の一部でした。

昭和二十七年四月二十八日にサンフランシスコ講和条約が発効するまで、朝鮮人には日本国籍がありました。朝鮮人がかつて日本人だったという認識を、今日の日本人がど

れだけ持っていることでしょうか？

ほとんどの人たちの意識には、はじめから北朝鮮という国と韓国という国があり、それを基に、今日の朝鮮半島の論議が展開されているように思います。

日本の敗戦によって、戦勝国であるアメリカとソ連が朝鮮半島を分割し、そこに韓国と北朝鮮という人工的に作った傀儡国家、すなわちポツダム国家が、韓国であり、北朝鮮です。

ポツダム国家とは、米・ソ東西冷戦を見据えたポツダム体制下で、南北朝鮮と台湾、それに戦後の日本も含めて人工的に建国した傀儡国家のことです。

朝鮮半島の場合はソビエトが崩壊し無くなつてしまった結果、北の半分が独立したようになっていますが、実は北朝鮮もポツダム国家だったのだという認識を持つことが必要です。

日本をはじめ、韓国、北朝鮮、台湾を改めてポツダム国家だとして見なければなりません。

日本は日米安保体制の下、ポツダム国家としてアメリカの言うことを聞かざるを得ない体制です。そのためかつて朝鮮半島のすべてが日本であったという歴史的な事実を黙殺して、朝鮮半島の南半分だけを国家として承認し、相手

として付き合わなければいけないことになりました。しかし、朝鮮半島の北半分だつて、歴然とした元日本です。

もっと早くからきちんと日本が南北と平等に交流し、日本人が南北の仲介者となつて朝鮮の統一を果たして、朝鮮半島の本来の姿に戻すぐらいの、つまり日本が中心になつて、本来の朝鮮半島を復元する政治や外交が必要なのです。

——十匹の鼻の欠けた猿——

玄洋社には、「人民の権利を固守すべし」という憲則があります。このことは、葦津珍彦のところでは話をしていました。玄洋社出身の政治家で、愛国者団体の東方会を率いていた中野正剛という人がいます。彼は、思想的には紆余曲折の人で、玄洋社の長老は「中野は赤うなるけん、気をつけなければいかんばい」と、左になるから気をつけなければならぬと言っていたと言われています。

東方会を結成した当時の中野正剛は、ドイツのヒトラーやイタリアのムッソリーニの影響を強く受け、黒い制服に身を包んで、獅子吼していました。

しかし、最後には日本に回帰し、「彼らに見下ろされていくように面白くない」と言つて、書齋に掲げられていた、ヒ

トラーとムッソリーニの写真の額を下ろして、東條英機首相と最後の勝負を賭けて、割腹自決をしました。この時、彼は、大楠公の銅製の置物を床の間に飾り、地元福岡の作家、雑賀博愛が著わした『大西郷全伝』の城山自刃の場面を読みながら、古式に則つた見事な割腹自決を遂げたのです。

中野正剛の最期の生き方というのは、まさしく玄洋社的な生き方でした。東條英機による大東亜戦争の指導のあり方に対して、大政翼賛体制を強化した軍閥体制を幕府的だとして、中野正剛は政府批判を激しくします。

東條幕府と戦つた中野は、その最期に際して、自らの講演のテーマである「天下一人を以て興る」という生き方を実践しました。

数万人の聴衆の前で彼は、「東條幕府打倒」を叫び、「天下一人を以て興る」ということを叫びました。

頭山満は、「一人でも寂しくない人間であれ」、「一人で千人の力を持つ」と教えており、中野正剛は、この頭山満の思想的影響を大きく受けていました。

頭山満が日頃からよく話した喩え話があります。

「一〇匹の猿がいて九匹まで鼻が欠けている。一匹だけ鼻がついている。だけど鼻欠け猿から『お前は余計なものがついている』と言われて、その猿は、せっかく付いている鼻をわ

ざわざわ自分で削ぎ落してしまふ。そういう者が多い。せつかく付いている鼻を削ぎ落してはいけない」

頭山満は、若い人に対してそういう薫陶くんたうをする人でした。中野正剛は、大東亜戦争の最中でありながら、玄洋社流の言論の自由を貫き通した人です。昭和十八（一九四三）年元日の『朝日新聞』の社説に彼が記した「戦時宰相論」が掲載されました。その内容は「日本というのは天皇国だから特別な英雄は要らない」というもので、故事を例に東條首相を批判しました。それを読んだ東條首相は怒り、その日の『朝日新聞』を発禁としますが、この時に新聞は、ほとんどの購読者に配達された後でした。

当時の朝日新聞の社長は玄洋社の緒方竹虎たけとで、中野正剛の竹馬の友でした。

この記事が一因となって、政府や軍部から弾圧を受けた中野正剛は、東條首相に抗議をするために立派に腹を切つて自決しました。それがきっかけとなり、大規模な東條倒閣運動が惹き起こり、東條内閣は倒れます。

中野正剛の自決は、権力を屁とも思わない、玄洋社流の戦闘的な民権精神の現われです。彼の最期を見てわかるように、玄洋社の民権意識は口先だけではなく、生命を賭して民権を実践する武士的なものなのです。

緒方は、「中野は死んで東條に勝つたのだ」と言っています。

中野正剛の自決からわかることは、玄洋社流の物の考え方です。玄洋社は創立以来、官僚的な政治に対して、一貫して抵抗して来たことが、はつきりと理解できるはずで

す。中野正剛の生涯を見た時、私が是非とも話しておきたいことは、現在の政治家で、腹を切る覚悟がある人はいるのか、ということですよ。

自分の信念しんげんに殉じること、自決する覚悟を持って、巨大な権力と戦う国会議員が果たしているのでしょうか。

自民党などは、政権維持に固執するために、まったく思想も信条も異なる宗教団体を背景とする政党と野合して、議席数をかるうじて維持しています。まさにその傲慢な政治姿勢は、現代の「幕府」だと言っても、決して過言ではありません。本来、政治家が何か言ったり、やりたかったりするのであれば、中野正剛の精神に学ぶべきです。

今日のような議会制民主主義からは、断じて維新はあり得ないし、国の建て替え、建て直しは、戦後のアメリカが日本に押し付けた民主主義からは出てきません。戦後の民主主義を超えたところに、維新が成立するのです。

中野正剛が腹を切ったのは、東條幕府から言論を封じられたからです。彼は政府の弾圧によって、筆を折られ、話

中野正剛が切腹したという知らせに、頭山満は一番に駆けつけて中野の遺骸と対面しました。遺書には「護国、頭山先生」と認めてありました。

――筆を折られた中野正剛の肉体言語――

中野正剛の葬儀に臨んで、東條首相の副官である赤松大佐が、葬儀委員長である緒方竹虎のところに来ます。

この時に大佐は、「東條閣下の花輪を受けるか」と、緒方竹虎に質たたしたところ、彼は、「故人は恩讐おんしゅうの彼方にあるから、どなたの花輪も受けるだろう。しかし葬儀を行うのはこの世にある者である。花輪をどこに置くかは葬儀委員長が決めること。どこに置いても良いというのであればお受けしよう」と応えます。すると、赤松大佐は真つ赤になって帰って行きました。中野正剛の葬儀には、東條首相からの花輪は来ることはありませんでした。

政府は、中野正剛の葬儀を、反政府のプロパガンダであるから「行くな」と国民に対して禁止勧告をしました。ところが青山斎場には、政府の勧告を黙殺した、実に二万人以上もの一般人が参列しました。

参列者の中に軍閥の姿はありませんでした。それを見た

すことも保安条例で禁止されました。そうした中で、彼は抗議の切腹をしたわけです。まさにそれは、権力によって筆を折られ、口を塞ふさがれた者による無言の肉体言語だったのです。

今の国会議員は何かやらかすとすぐ謝ります。「二度とないようにします」とか「記憶にございません」とか言って、口先みの謝罪をし、議員辞職さえもなかなかしようとしません。自分か正しいのならば、謝らずに、自ら間違っていないことを主張して、殺されるのだったら殺されたらよい、という覚悟が必要です。口先で謝るのではなく、腹を切つて国民に謝罪すべきが政治家というものです。

しかし今日の政治家の「ごめんなさい」は口先三寸で、まさにそれは詐欺師の言い訳にしか過ぎません。国民の血税で生き続ける詐欺師は犯罪者であり、刑務所に繋がれ、時には死刑になつても当然です。



田中 健之（たなか たけゆき）

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。玄洋社初代社長田中浩太郎の重孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する一族。拓殖大学日本文化研究所近代研究センター委員研究員を経て、現在「ロシア科学アカデミー」東洋学研究所及びモスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長、2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に「満洲に祀られる人々」、「昭和維新」、「北朝鮮の終焉」、「実は日本人が大好きなロシア人」、「横浜中華街」など。中央公論「正剛―歴史群像」などの論評に多数執筆。